

う な ば ら 海原

題字 河原孝好先生

発行
平成23年12月1日
第34号
海城学園 海原会

〔海原会事務局〕
〒169-0072 東京都新宿区大久保3-6-1 海城学園
TEL 03-3209-5880 FAX 03-3209-6990
E-mail : unabara@kaijo.ed.jp

海原会サロン 活動の輪 広がる 来訪者1300人超



海原会会員の親睦・交流の場として企画された「海原会サロン」が今年も9月17・18日の両日、母校の文化祭「海城祭」の場を借りて開設されました。海城祭は今年も2万人もの人が訪れましたが、海原会サロンの来場者も昨年を大幅に上回る約1300人になりました。受験生とその父兄、現役の生徒などにも広くOB会の存在をPRすることができました。今回はとりわけOB諸先輩がサロンを待ち合わせ場所に利用したり、「サロンがあるので卒業以来初めて学校に来てみました」と言ってお立ち寄りしたOBもみられ、本来の「サロン」として多くのOBにも利用されてきたものと喜んでおります。



各展示内容についても一段と充実したものとなり、訪れる人たちの関心を引き付けていました。中でも各年次の卒業アルバム展示は好評で、手にとって自分自身を探す卒業生や、お爺さんやお父さんを探す家族や孫の姿も見られ、次回以降さらに見せ方を工夫していくことを考えております。

また今年には学園の文化祭実行委員会の展示とのコラボも実現。また学園のPTAと連携して、海原会の帽子やTシャツなどの販売を実施したり、生徒の様々な活動をまとめたDVDをサロン会場で放映するなどもしました。「海原会サロン」をきっかけとして海原会の活動の輪も広がりを見せています。

OB 生徒 父兄の連携深まる

がんばろう日本！ 那須校がんばれ！ 一日も早い復旧・復興をお祈りいたします

海原会サロン



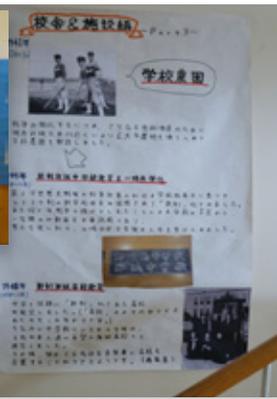
◆「変遷」

海城祭のテーマは変遷。海原会サロンでは文字通り海軍予備校時代から昭和時代までの変遷を掲示した。なかには大先輩の方なら懐かしい写真に想いを馳せ、若手のOBの方なら過去の姿に関心を抱かれたに違いない。

展示コーナーは「3つの校章」「海城の今むかし」「創立者古賀喜二郎伝記」「海城新聞史・輝く新聞賞!」「戸山ヶ原の海城」「変遷する学び舎」それに机上には人気の高い数10冊の『卒業アルバム』など。その他、錨のマーク、KSマークの応援帽・ポロシャツの頒布会など、活況を呈し楽しませた。

◆在校生とのコラボレーション

今回初めて、文化祭実行委員会の創意で、本館の3階から6階までの階段壁面を利用して、海城の変遷史を展示した。サロンストップとのコラボで、手書き文章と写真の入ったパネル判13枚の力作。生徒らしい目線で見るものへの関心を誘う展示が実現したことは特筆に値する。(山本)



生徒の顔200枚

ことしは那須校との合同で海城祭が開催された。那須校の一室を覗いてみた。驚いた! 教室丸ごと約200枚生徒の顔写真が貼ってある。笑った顔、とぼけた顔、ふざけた顔など等。そしてDVDで那須での学園生活を紹介している。まさにインスタレーション作品だ。被災と言う悪状況の中から自らを救い出す夢を追っている。



ると思うと、感慨深い。更に破壊された校舎の写真も貼ってある。彼らの精一杯の表現に思う。この災害の中で、那須校に常設してあった「われら海城人」の先ごろ亡くなった青葉益輝氏の作品数点も避難し、この3号館の那須海城祭の廊下を借りての初公開作品展をしてくれた。(山本満男 記)

1、2ページ共 写真:立石・山本・杉山・池内・国井・岡本

那須校だより

那須高原海城中学高等学校教頭 (平成30年卒)

塩田 顕二郎



震災避難で深まった両校の絆、合同で学園祭も

東日本震災によって被災をした本校は、5月9日より海城中学校・高等学校の3号館をお借りし、新年度・新学期をスタートしました。多くの生徒は自宅から通学し、通えない生徒は多摩市にある桜美林大学の宿泊施設から通学してきています。震災によって避難を余儀なくされ、全寮制の看板を一時おろさなくてはならなくなってしまうことは大変残念でしたが、これまでなかなか交流の機会が持てなかった海城中学校・高等学校のみなさんと一緒に活動ができるようになったことはとても嬉しいことでした。

まず交流がはじまったのは、部活動でした。剣道部や柔道部、サッカー部には本校の部員と一緒に練習しています。夏休みの合宿に参加したクラブもありました。また、9月の海城祭は海城と那須海城の合同の学園祭として開催し、那須海城は3号館で展示・発表を行いました。準備の段階では慣れない環境にとまどう生徒が見られましたが、那須海城らし

さを発揮しようといこれまでの経験を生かしたアイデア満点の展示が多かったと思います。そして、学園祭当日は海城生のパワーに負けないよう、那須海城生も前庭で一生懸命に勧誘をしたり、ステージのイベントに積極的に参加したりと合同の学園祭を楽しむ姿が見られました。

さらには、図書委員会が積極的に交流を行っています。海城祭では古本市・ノートコンクールを共同で行いましたが、先日中間試験最終日には「国会図書館への視察」を実施し、はじめて合同での校外行事を行いました。来年度、那須に戻ることは困難な状況ですが、しばらくは代替地において全寮制教育ができるよう準備を進めています。震災によって深まった両校の絆が今後も継続していきけるような活動を続けていきたいと思います。



平成23年度海原会総会

義援金200万円 学園に寄付

6月の第一土曜日（今年6月4日）に定例の海原会総会が開かれました。今年は学園120周年、海原会90周年という節目の年にあたり、約300名のOBが参加しました。会場となった講堂は満杯状態、原発事故の影響による節電でクーラーが抑えられるということもあっていつにもまして熱気？につつまれた総会となりました。

今年の最大の議題は大震災。総会をはじめに東日本大震災で被災し亡くなられた方々に黙祷を捧げた後、徳光会長の挨拶で始まりました。海城学園の兄弟校である那須高原海城中学高等学校も寮や校舎が震災で損壊するなど大きな被害を受けました。

来賓の古賀学園理事長及び水谷学校長からの挨拶のなかでも、その厳しい状況が報告されました（挨拶全文は海原会ホームページをご覧ください）。幸い生徒たちは全員無事に東京他に避難していますが、新宿校を借りての授業など不自由な生活を続けています。海原会としても那須校の一日も早い復旧を願いつつ、母校に対して義援金を贈ることを決議、徳光会長から古賀理事長に200万円を手渡しました。

一方、恒例となった卒年記念品贈呈は懇親会の場で行われ、会場のカフェテリアは1、2階を埋め尽くすにぎわいを見せていました。今年は20周年記念の対象者が3人、30周年は18人、40周年6

人、50周年46人、60周年以上は22人で計95人でした。対象年時の卒業生がこの総会を機会に同窓会などを開催するケースも増えており、そのためもあって30周年の対象者は前年の2倍、50周年の対象出席者は昨年の3倍以上となりました。また来年も総会・懇親会でお会いしましょう。

（小西）

会長・理事長・校長の挨拶は海原会ホームページに掲載されています。http://www.unabarakai.jp/



海原会90周年記念事業

「三笠」見学会 雨中に20余名が参加

日露戦争の勝敗を決した日本海海戦の立役者、戦艦三笠の見学会を6月11日に挙行了しました。あいにくの雨にも関わらず22名もの皆さんが参加、(社)三笠保存会の御厚意による特別の説明を受けながら船内をくまなく見学しました。見学後近くのホテルで横須賀名物の海軍カレーを食べながら歓談して散会しました。そのころにはちょうど雨も上がり港見学などに出られる人もいて、初めての試みであった見学会を無事終了しました。

学園の先輩である石川達也氏（S25年）が(社)三笠保存会の理事を務めていることから企画されましたが、当日は説明員として元海上自衛隊将校の古宇田和夫氏をお迎えして頂くなどお世話になりました。お陰で、たとえば「海戦時の日ロの戦力差は10対1」で圧倒的に日本が有利だったこと、また「鋼鉄船での世界初の海戦であり、近代海戦の歴史的な意味がある」「この勝利に慢心したことがその後の日本の道を誤らせた」など、とかく大勝利ばかり強調される日本海海戦の裏舞台の話なども聴けて興味深いものとなりました。記念艦として三笠が横須賀の地に今の姿で残されるまでたどる数奇な運命も一大物語となりますが、「もし三笠が海戦当時のそのままの姿で現存していれば間違いなく世界遺産でしょうね」という一言にその重さを感じる見学会でした。

（昭和41年卒 小西洋也 記）



同期会 クラス会 だより



昭和23・24年卒 海原三三四会 卒業時の一割が集う

昭和23年最後の旧制中学卒業生と昭和24年第一回新制高校卒業の私たちの学年は、20年以上も毎年5月の第3土曜に海原三三四会懇親会を開いてきました。今年は懇親会の計画立案時期に東日本大震災が勃発し、2週間遅らせたため、5月28日になりましたが、例年通り有楽町にある日本外国特派員協会です。昨年より一名少ない21名の仲間が集い、同期会を開くことができました。

旧制中学卒業時は4クラス約200人だった。卒業後63年の年月を経て約60名の所在不明者、61名の物故者、18名の懇親会案内状辞退者があり、また健康状態からの欠席がある中、卒業時の一割が集えたことになりました。本年の三月までに全員傘寿を迎え、お互いの健康を祝い合い、先に逝かれた友および東日本大震災による逝去



者に黙祷を捧げた後、昨年と同じく東映アニメーション公社取締役として現役で活躍している泊懋が開会の挨拶をし、乾杯してから数名ずつ個々のテーブルを囲み、団欒。席を渡り合いながら再会を楽しみました。お互いに健康が第一である事を実感し、次の再開を祈念して散会しました。

(昭和23年卒 大貫金吾 記)

昭和25年卒 同期会 胸突き八丁「傘寿」迎える

秋も深まってきた10月13日、恒例の

年次同期会を南青山の「うすけぼー」で開催。

昭和25年海城高校卒のわれわれは、今年から来年にかけて、人生の八合目を超える。平均寿命をやや上回ったわけで、まずは同慶の至り。しかし、同期の仲間約40%が鬼籍に入っており、寂しさを禁じえない。

顧みると、われわれは戦争末期の昭和19年に入学のあと、翌20年には終戦の夢は消えた。それから、高卒までの5年間は、「解放」と「自由」の風潮が



うねるように高まった時代、学業のかわら、スポーツや文化活動など、「部活」も大いに楽しんだ。このように、われわれは、まさに世の誰も経験したことの無い大変な激動の時代を駆け抜けてきた。

この日集まったのは20名。世話人の尾上武郎君を進行役とし、永遠の旅に立った仲間たちの冥福を祈って黙祷を捧げ、足立和君の開会挨拶、秋山哲見君の乾杯音頭で宴に入る。すぐに談笑の輪が広がった。話題は、過ぎし日々の想い出やお互いの健康、そして家族のことなど、会場は大いに盛り上がった。

宴たけなわ、この同期会の今後の運営について各自が意見を述べたが、「出席者が2人になるまでやるべし」という提案もあり、今後の続行を申し合わせた。友よ！来年もぜひお会いしましょう。なお、秋山君の祖父・秋山好古が主人公のひとりである「坂の上の雲」第3部（NHKスペシャル）が12月5日（日）始まる。

(梅沢喬一 記)

昭和26年卒 海原三六会 健康は金で買えない

「三六会」は偶数月の第四日曜日の午後2時から「高円寺パーティー」の名で太田稔君の店「アルシェ」で開催している。今回は6月4日の海原会総会で旧交を温めたばかりということもあって、市川成夫、太田稔、小川晴望、

小竹康幸、小館啓人、高田雄一、中村日出男、星川敏夫、山口準一、それに山本安司の10名だった。今年は卒業60



年の記念の年ということ、もう少し多くの人が来てくれると思っていたが、多少残念な気がした集まりとなった。しかし会えばお互い学生時代に戻り、終戦直後の厳しい時代の話に花が咲き、流れゆく時間も忘れ、最後は「健康は金で買えない」という言葉の意味に自己を重ね、これからお互い元気で過ごしていけるように、多少自虐的な意味を含めた励ましか慰めかの言葉を交わして散会した。

(小川晴望 記)

昭和27年卒 海原二七会 思い出す青春群像

昭和20年敗戦の翌年21年にわれわれは海城に入学したことになる。新時代の幕開けの第一期生かもしれない。振り返ってみると、どん底生活だうたにも拘らず、何故かカーキ色の服達と自ら救い出す自由を求めて、「闇市」へと青春を送った気がする。確かに闇市そのものがまさに民主主義を象徴する文句なしの事象だったと言える。



卒業してから60年、遠い思い出になった。今年も無事同期会を開催する事ができた。立食から円卓に、時間は早めにと気を使い、あやしいお爺さん？の集まりになった。結果21名元気な姿を迎えた。残念ながらこの年になると「黄泉の国」へ逝かれる仲間が出る。とても淋しい。また、体調を崩して出席出来ない仲間も多くなってきた。頼もしいのが未だ現役で活躍している者もいる。

アルコールも入り賑わってきた。最初に母校の現況報告、那須海城の事など関心をもたれた。そのあと森山富夫君の気合の入った司会で盛り上がった。話題は尽きない、三角山で遊んだ事、隣の学校とケンカした事など、学校生活の思い出に華が咲き、お互いの近況など盛り沢山。あつという間に時間切れになった。来年は坂本誠一君の顔利きで貸し切りでやろうと威勢のいい提案でお開きになった。みんな元気で。(山本満男 記)

昭和28年卒 海原二八会 喜寿の会

毎年喜寿を迎える学年があり、今年はずいぶん海原二八会というわけだが、中学・高校時代の顔ぶれならば、年齢のことなどいまさらいう必要もない。元気でいられることは誠にうれしい。(他界した友、体調おもしろくない友たちには申し訳ないが。)

昭和9年生まれ。小学校に入学し



た年の暮に日本は第二次大戦を引き起こし、成長した時は戦地に行き、国のために死ねと教え、外国の地で日本兵たちの命を奪い、沖繩の人を死なせ、都市を空爆させ、人命と住む家を失わせ、拳銃敗戦。栄養失調でこのまま大人になれるのかという世代だった我々が元気に集まった。創立以来の男子校海城に女子の卒業生が存在するのも戦争の影響だが、これも不思議な縁としかいえない。ともあれこの会が今後何度ももたれることを祈って。(片山忠美 記)

昭和33年卒 海原三三会 卒業後53年、初参加2名!!

晩秋の爽やかな一日、同期三三会を楽しみました。

場所は若者の多い町、高田馬場ビッグボックスです。9階の宴会場に集まったのは昨年と同じ27名。

先ず、7月9日に他界された青葉益輝君のご冥福を祈ると共に、物故者に黙祷。司会進行は鈴木紀孝君と池内宏君。開会挨拶と乾杯は神影流25世、豊島一虎君で始められた。



卒業以来53年、初参加2名、小菅健義君と松原正幸君。大変嬉しい、幹事冥利に尽きるとはこのことか。近況報告で小菅君は国語が不得手で薬剤師になり、都下のおきる野市で薬局経営。松原君はバスケット部で活躍したスマートな体形は今も変わらず。古賀君からは今回の震災と放射能の影響を蒙った那須校の現況報告と、本年度から六年制一貫校となり募集を中学からとしたことの報告がありました。

昭和36年卒 36会定期総会 幻の修学旅行実現を鶴首

今年も海原会総会前の36会定期総会を開催しました。本年は卒業後50年目の記念すべき年度のため43名(予定46名)の参加者あり、山田会長の挨拶で開会。よそ見は溝口・杉山両君。懐かしい教室にキョロキョロ。主議案の往時、諸事情で実施されなかつた修学旅行実行案も熱海・箱根・茨城を候補に一泊案で内定。以後詳細検討で可決。今回は東北大地震被災地の岩手から木下君も駆けつけ、被災状況を克明に報告してくれました。一同木下君の無事に安堵。海原会懇親会では50年記念品を徳光会長より授与されましたが、代表で木下君が頂きました。徳光会長と木下君のツーショット写真は地元の皆様に披露して明る

(前田昌則 記)

い話題にと、木下君大喜び。

懇親会終了後も二次会三次会と繁華街を徘徊し、とても70才目前とは思えないエネルギーみな皆で、秋の修学旅行実現を鶴首して分かれしました。

(赤石浩 記)

昭和47年海城中学校入学同窓会

恩師池田健一先生を偲ぶ集い

6月19日、海城学園カフテリアにおいて1972年入学の海城中学同窓会・今年お亡くなりになった池田健一先生を偲ぶ集いを行いました。退職された関尚樹先生、名物草野先生、売店のおばばを交えて、29名が再会を喜び、池田先生の思い出を語り合いました。池先(当時みんなそう呼んでました)の奥様お嬢様にも参加していただき、夫、父親としての池先も垣間見たことができました。海城で過ごした学生生活を池先なしでは何一つ語ることができないほど、お世話になりました。池先から受けたけつピン、浅貝スキー教室、うちの代から始まった修学旅行でのホームステイ、何度家庭訪問をしていたか……。感謝そしてありがとうございます。合掌。(昭和53年卒 横田秀美 記)

昭和54年10組(前崎組)同窓会 母校見学会を実施

梅雨入り最初の土曜日の夕方、母校に13名が集まり、海原会の中村さんにご協力いただいて「ミニ学校見学会」

を行いました。新しい校舎や講堂を見て驚く一方、我々が学んだ校舎や教室がまだ残っていることに感動するなど、とても充実した45分間でした。残念ながら、当時お世話になった先生方の多くは様々な形で母校を去られてしまいました。剣道の内堀先生にお会いすることができ、その元氣なお姿に30年以上前の高校生活がまざまざとよみがえってくる思いでした。

母校を出た後は後発の3名を合わせた16名で、これまた韓流ブームで大きく変わった新大久保の町で酒を酌み交わしました。フルマソンで立派な成績を残している者、メタボ対策に取り組んでいる者、タイ(東南アジア)が大好きな者、平気でユツケをほおぶる医者たちなど、気の置けない仲間との楽しい3時間を過ごしました。

なお、今回の集まりの連絡が届かなかった方の中で、もしもこの記事を読まれた方がいらしたら、ぜひご一報をお願いします。なお、今回のような比較的規模の大きい同窓会とは別に、不定期に都合のつくメンバーで会っていますので、「海原会へのお問い合わせ」ご連絡経由で里方宛に是非ご連絡ください！(里方昭彦 記)

昭和56年3年6組クラス会 卒業30周年のクラス会

6月4日(土)海原会総会後、昭和56年3年6組クラス会を新大久保駅前の焼鳥屋でおこないました。出席者は担任の河野先生を含めて26名、北

は北海道、南は九州から駆けつけてくれた仲間もあり、盛大なクラス会となりました。卒業以来30年ぶりに会う級友もあり、久しぶりの再会に一同大いに盛り上がりました。飲みかつ語り、思い出話に大笑いしながら、かつての同級生がそれぞれに活躍の場を広げて頑張っている姿に、大きな刺激を受け、たつぷり元気をもらいました。

(内田玄司 記)



昭和56年3年6組同期会 暑気払いの会

8月20日(金)、1981年卒河野組のクラス会を田町の居酒屋で開催いたしました。

ドタキャン等ありましたが、無事10人の同期が集まり、過去の思い出、近況報告、近況報告に尾ひれがついた四

方山話が弾みあつという間の4時間でした。卒業後四半世紀以上が過ぎ、世界各国に散らばった同期も多く、改めて日本の国際化も進んだものだと確信した次第です。年数の経過とともにクラス単位での集まりが減っている中、定期的なこのような集まりを企画している同期の結束も改めて実感しました。今回のクラス会のためにお互いのメールアドレスを交換し無事終了しました。この場を借りて幹事さんお疲れ様でした。

(百田正道 記)

昭和56年5組(五十嵐先生)クラス会 20数年ぶりの再会

真夏の暑さが残る9月10日(土)、「新宿ライオン」で20数年ぶりのクラス会を開催しました。連絡先がわからない者もいる中で、幹事の庄司君、林君、山本君と手分けして連絡をとりあつた結果14名の旧友、そしてお忙しい中、2年間お世話になった五十嵐先生を囲み、30年前の思い出を語りたり、近況を報告し合うことができました。外見は「名前が出てこない」程、変化している者もいて30年の時の長さを感じました。しかし、話をしてみると昔のままの個々の内面や感性をそれぞれに見つけることができ、30年の時が経つても変わらない空気の中で楽しい時間を過ごすことができました。これからは定期的な開催を行うことを約束して散会となりました。次回

はさらに賑やかな会になればと思います。(永尾一彦 記)

昭和56年卒 同窓会

「高校生」のまま歳を重ねる

6月4日(土)に行なわれた海原会総会、我々は卒業30年の節目でした。数名で手分けしながら声を掛け、当日新大久保駅前に揃った同期は8名。クラスもクラブも違うという仲間もいましたが、それでも「同期のよしみ」で仲良く、懐かしの通学路を、当時を思い出しつつ母校に向かいました。学校に着いてからは、懐かしの校舎やグラウンドを回る者、職員室で恩師を探し、昔話に花を咲かせる者、売店で懐かしのおばさんと対面する者など、思い思いに総会開始までの時間を過ごしました。

総会では、那須海城の被災の状況などを聞きし、胸を痛めました。閉会前には福島先生の名司会の下、吹奏楽部の諸君の演奏を拝聴、最後には校歌を5番まで歌わせて頂き、このときは講堂に集ったOBがまさか一つになつたような気がしました。

総会の後の懇親会では、さらに数名の同期が見つかり、再会を喜ぶとともに互いの健康や近況などを確認していました。

懇親会終了後、草野先生と有志11名で新宿にて2次会を行いました。草野先生は80歳を超えられた今も元氣で、感激ひとしお。既に50歳が近

くなった我々ですが、多くの思い出話や先生のお言葉に、「高校生」のまま歳だけを重ねたような錯覚に陥ったひと時でした。30年という節目の総会に参加し、懐かしい顔に出会えて本当に良い一日となりました。

最後になりましたが、2次会に参加して下さった草野先生、また総会、懇親会を企画して下さいました海原会の役員の皆様、素晴らしい演奏を聴かせて下さった吹奏楽部の後輩諸君や指導に当たられていらつしやる先生方等々、多くの方々に心より感謝申し上げます。次第です。(益田浩一郎 記)



平成5年卒 3組クラス会 10年ぶり、一次会前に出来上がる

大勢で集うのは、亡くなった同級生村君の葬式以来、ほぼ10年ぶり。1次会の前に来られるやつは早めに来ようという話が、ゼロ次会という集合になり、なんと11名が集台。

林先生をお呼びしての1次会前に、大半がへれけけという状態になりました。一次会の出席者は13名。卒業以来初めて顔を合わせる人も続出で大盛り上がり。この会を機に、Facebook等で居場所を確認し、プチ同窓会として気軽に会うケースが増えています。(小市琢磨 記)



平成5年卒 小林組同窓会 ネットで盛り上がる

7月2日(土)に、恒例の同窓会を開きました。もともとは3月に予定

されていたのですが、東日本大震災を受けて延期となっていました。例年とは違う時期でありながら、小林先生と同期7名(石北、石塚、岩間、阪田、杉山、吉田(大)、下川原)が新橋・ピ

アライゼ'98に集合。卒業してからも20年近くがたち、日本全国のみならず世界各地で活躍している面々も多くなってきました。そんな面々の近況を肴にして、うまいビールを堪能しました。また、飲みながらFacebookにある海城高校平成5年(1993年)卒のグループに、小林先生の勇姿やみんなの集合写真を投稿したところ、メンバーからコメントが寄せられたりして、ネット上でも盛り上がりました。そのままの勢いで、二次会に突入。岩田君が合流して大いに盛り上がりました。さて、今回の同窓会は、小林組に限らず1993卒のメンバーであれば参加OK!ということにしました。小林先生に久しぶりに会いたい!という方も多いと思います。来年2月か3月くらいになるかと思いますが、Facebook上でお知らせしますので、是非楽しみにしてくださいませー!

(下川原 y.shino@yellowplata.or.jp 記)

平成14年卒 学年同窓会 第6回学年同窓会

毎年恒例となった学年同窓会も今年で6回目を迎えました。先生方から海城学園についての近況報告(完全なる中高一貫化や最近の学生の様子等)がなされる一方で、卒業生からは



それぞれの分野で活躍する様子が報告されました。徐々に若手から中堅へと成長し、仕事もプライベートも充実させている同窓生の様子を共有することで、学生時代への郷愁を深めるとともに、今後の益々の活躍に向けて意識を高めあうことができました。

学年同窓会は今後も毎年同じ時期に開催する予定です。来年は高校卒業後10年という節目の年に当たります。年々忙しさが増してくる時期だと思いますが、過去を振り返り、旧友と語り合うことで将来への活力を得ましょう! これまで案内が届いていなかった方は是非こちらのメールアドレス(kaijo2002-owner@yahoo.co.jp)まで御連絡下さい。同窓会に関するご意見もお待ちしておりますので、宜しく御願ひ致します。(矢野祐規 記)

平成19年卒 6・4同窓会 60年後も変わらない仲間

現役で大学に進学した人たちが良いよ卒業を迎える3月、新宿で元6年4組の同窓会を開催しました。担任だった「ほんまじ」こと本間純二先生を始め、20名を超える仲間が集まってくれ、とても楽しい時間を過ごすことができました。社会に出る人、大学院に進学する人、諸事情で1年多く大學生をやる人など様々でしたが、皆が口を揃えて言っていたのは「しかし変わらないなあ」ということ。卒業以来それぞれが4年間違う環境に身を置いてきても、根っこにある部分はあまり変わらないようです。気取らない、気を張らない良い意味での「ゆるさ」。こんなのが大学に入ってから実感した海城生同士の居心地の良さだったりします。「海原」を見ると60年以上先輩の方々の同窓会が載っていたりしますが、60年後自分たちもそんなクラスになついたら良いなと思ひながら、新宿の街を後にしました。(長谷川恭平 記)

地域海原会・OB会

上智アメリカンフットボール部OB会 現役生との架け橋に

去る1月18日(金)、四谷の居酒屋「桑」にて宮川説夫さん(昭和54年卒)のお声かけにより、上智大学体育会アメリカン・フットボール部ゴールデ



ン・イーグルスOBのうち、海城高校出身者による同窓会が開催されました。当日は3名の現役大学生に加え、20代から50代のOB13名が集結し、海城高校アメリカン・フットボール部ドルフィンズの現状、合同練習やルール・技術指導等による現役高校生との交流の可能性について熱い議論が交わされました。世間的には余り知られていませんが、上智大学アメリカン・フットボール部はかつて関東大学1部リーグ所属チームとして大学アメリカン・フットボール界における強豪の一角を占め、ドルフィンズOBを始めとする多くの海城高校出身者が歴代、チームの中心選手として活躍してきました。

昨年、ゴールデン・イーグルスは2部復帰を果たし、念願の1部復帰を目指してチーム一丸となって日々の練習に取り組んでおられますが、我々OBも定期的に参集し、ドルフィンズ及びゴールデン・イーグルス双方の架け橋となり

両チームが更に発展出来るよう、微力ながら現役部員のお手伝いが出来たらいいな、と思っております。

(平成23年卒 佐藤清吾 記)

湘南海原会 30回記念迎える

湘南海原会も第三十回記念を迎えた。平成七年に茅ヶ崎の地に産声を上げ、会員一人ひとりの湘南の風のような健やかな気持ちがこの会を育てたのではないかと。まさに継続は力なり



である。会長挨拶各会員の近況報告、肩の凝らない会話の中での食事会、まだまだ皆老いてますます盛んである。新会員来たれの気持ちを互いに忘れぬことなく次回11月25日(金)の再開を約し散会。

(昭和29年卒 佐藤都志雄 記)

退任・退職

田中政一先生、今年度で 野球部監督を勇退

野球部監督の田中政一先生が今年度いっぱい監督を勇退されることになりました。

政先生は大学卒業された直後の昭和45年に海城学園に奉職。以来42年間、監督として野球部を率いていらっしやいました。監督としてもっとも印象深い出来事は、「野球部長だった河原先生が亡くなったとき」だそうです。確かに、戦後の野球部員は河原先生が政先生のどちらかもしくは両方に必ず教えを受けてきました。



「若いときは本気で甲子園狙いで指導してきた」という政先生でしたが、普通の野球好きな子が推薦で選手を集めた強豪校を相手に一歩も引かない野球に、いっしょか醍醐味を感じるようになったそうです。未来の野球部へのコメントは「文武両道でがんばれ」とのこと。政先生、今までありがとうございました。4月からは梶徹先生が野球部監督に就任されます。

(国井信男 記)

鈴木元明先生ご退職 アメフト部顧問慰労会

46年以來、39年の長きに渡り本学で活躍されました鈴木元明先生がこの3月でご退職されました。

ご専門は生物学。前理科主任として本学の理科教育に尽力されました。部活動では陸上部、生物部、アメフト部などの顧問を歴任。とりわけアメフト部は25年以上にわたりお世話を通じ、中興の祖として多くの部員と顧問に慕われま

した。写真4月24日に行われた明治学院東村山高校でのアメフト春季大会(対早稲田実業)後、部員から感謝の辞を送られる先生、そして、その後



(川崎真澄 記)

異色のイベントプロデューサー

康 芳夫 さん
こう よしお (昭和31年卒)



学園の思い出

昭和25年に中学入学して卒業するまで住んでいた百人町から歩いて通学

した。そのころは歌舞伎町や新宿二丁目辺にも同級生がいた。当時は歌舞伎町など近かったけれどまだまだ平屋の住居が多かった。昭和30年代に入つて急速に町が変わり繁華街に変貌して行った。戦後復興の慌しさはあつたが受験競争などなく、のんびりした時代だった。上級生には校舎不足による委託制度があり女子学生がいて共学だった。

思い出に残る先生は英語の亀谷悟郎先生、林青悟のペンネームで何度か直木賞候補に挙がっていた。南京大学の教授になられたが先年亡くなったという。星野先生には解析の解き方を教わり目から鱗が落ちたように数学に開眼、先生により随分違うと思つた。得意科目は一般社会で、突っ込んだ質問をしたりして社会科の先生の保守的な考えと対決したりした。そんな訳だから学校へ行かないことも多く、

他校の同じ様な学生と交わつていた。

文芸部で同人誌つくる

上級生には花形の野球部に寺島達夫氏がいた。彼はプロ野球東映フライヤーズへ入団したが、数年後に映画界に移り、東映で菅原文太、宇津井健らと共にハンサムタワーズを結成して売り出した。彼と喧嘩して互いに怪我をし、足が折れるかと思うくらい傷を負ったことがある。野球部は強く、都大会でベスト4(準々決勝)まで行った。この記録は破られていない。

学校では文芸部や卓球部に所属していたがそれなりに怖い存在だつたと思う。文芸部では同人誌を作り武者小路実篤から原稿をもらい掲載したこともある。高校2年の時に立命館大学の懸賞論文に応募、「国際平和」と言うテーマで入賞し、周囲の仲間を驚かせたりした。

大学でジャズコンサート企画

高校卒業後は横浜国大に進学したが、思い直して翌年に東京大学に入学したから一浪である。教育哲学を専攻した。大学では中国服を着て、肩までのロングヘアで通学したりしてユニークな存在だつたと思う。いろいろなことをしたが、3年生の時に「五月祭」の実行委員長に選ばれ、当時の保守的な時代に、大学祭でジャズコンサートを開催した。当時の茅総長に面談したことを思い出す。

個性的であれ

康さんは大学を出て、呼び屋として名をはせてきたが、今も現役で様々な分野でプロデュースやコーディネートとして活躍している。最後に、今の若者に望むことを聞いてみると、「往時渺茫として夢に似たり」と中国の詩人

白居易の詩の一節をあげる。人生は短いアツと言う間に過ぎるから、個性的な人生を送ることを常に心掛け、すべて時の経過が問題を解決するという意味においてこの金言を常に胸に収め、焦らず余裕のある人生を送つてはどうかとアドバイス。

(石原長夫 記)

(インタビュー 小川晴望、石原長夫)

康 芳夫 / 1937年(昭和12年)東京神田神保町で駐日中国大使侍医の中国人父と日本人母の次男として生まれる。1956年海城高校卒業、1957年東京大学入学、在学中から大物ジャズプレイヤーの呼び屋として活躍。卒業後はモハメドアリ対猪木戦コーディネーション、ネッシー探索、オリバー君招聘など珍奇でセンセーショナルなイベントを仕掛けてきた鬼才である。出版では戦後最大の奇書『家畜人ヤブー』をプロデュース。メディアの風雲児として活躍を続けている。

封じ込め研究に意欲

このセンターの所長になって2年目。思わぬ難題を抱えたように見えるが、「もちろん一人でやれることではないですが、何らかの形で放射性物質を封じ込めることができなにか研究してみたい」と三田村さん。さすが修羅場を経験してきただけに余裕がある。「下水からの資源回収やリサイクルなどまだまだ下水処理における可能性はあ」と意欲的だ。多摩川の水の半分はいまや下水の処理水だという。環境

北多摩一号水再処理センター所長

三田村浩昭 さん
みたむらひろあき(昭和62年卒)

思わぬ時の人に

東京西部地区の下水処理をカバーする北多摩一号水再処理センターの



し灰にされた汚泥は焼却処理しセメント原料などとして再利用されてきたが、放射性物質が入っているとその循環がストップ、一日5トンに及ぶ焼却灰の行き場がなくなつたのだ。そのため処理場構内に一時保管することになったがすでにその量7000トン、このままではパンクするという緊急事態に直面し、マスク、取材の前面に立たされていくというわけだ。

幸い埋め立て処理する処分場が確保され急場をしのいだようだが、家庭排水、雨水の最終集積地という下水

その間、処理排水に含まれる窒素リンによる東京湾の富栄養化問題や、

われら海城

マジックエアリスト

日向大祐さん

ひゅうがだいすけ(平成9年卒)

大道芸を研究する

津村大樹さん

つむらたいき(平成20年卒)

「なぜ今マジックなのか」 マジックに出来ること

プロマジシャンの日向大祐さん(平成9年卒)と、大学で大道芸を研究する津村大樹さん(平成20年卒)の二人に「なぜ今マジックなのか」をテーマに対談してもらいました。

津村 日向さんは大学でマジックに出会ったんですね。

日向 やりたいことは全て大学に入ったらすると決め、海城ではひたすら勉強しましたが、東大では勉強を最低限にしてマジックと芝居に打ち込みま

三田村浩昭所長(S62年卒)は今、時の人となっている。福島原発事故で下水処理場の汚泥から放射性物質が検出され、その汚泥処理問題が取りざたされているためだ。それまでは焼却

した(笑)。

津村 プロになることはいつごろ意識されたのですか。

日向 大学4年のとき、大学院への進学は決まっていたのですが、自分のやりたいことはここ(東大)にはなくて、舞台の上にあると思いました。まわりはせつかくいい大学を出たのになぜマジシャン?と言いますが自分としては一貫した人生だと思っています。

津村 日向さんはご自分のことを「マジックエアリスト」と表現なさっていますね。

日向 僕はお客さんと同じ空気を共有したいんです。

津村 つまり「magic+air+ist」と。僕は大学で大道芸の研究をしているんですが、大道芸の魅力の二つに「ステージがない」というのがあると思うんです。観衆との距離感が大事ですね。

日向 僕のスタイルのマジックは「人がいて初めて成立するものなんです。超絶技巧を極めると言うよりは場づくりの達人を目指したい。だからテレビで時間内にやるのは結構大変だったな。

津村 僕はテレビ番組で初めて日向さんを知りました。Podを使ったマジックは衝撃的でした。近年のマジック

処理場の役割や重要性に三田村さんはいま改めてその責任の重さを感じている。

フリーターから公務員へ

ブームとかマジック特集とかどう思われますか?

日向 昔あったNHKのマジックショーは良質でしたね。民放でやっているのはマジックブームというよりトリックブームかな。僕の出た対戦形式の番組だとまだ健全ですけど、種明かし番組とかはなあ…。

津村 まだまだマジックはエンターテインメントとして評価が十分でないよ。

日向 マジシャンに人としての魅力があれば、マジックの種ばかりに目がいかなくなると思うんです。マジックなライブで見に来てくだささい」と言えるくらいになりたいですね。

津村 日向さんは震災後にレクチャーノート(手品のテクニック解説書)の売上を赤十字に寄付する活動を行なっていましたか、マジックに出来ることって他に何かありましたか?

日向 震災のような事があつたとき、マジックは物理的には何の役にも立ちません。しかし、そういう困難なときにエンターテインメントに触れることは、「また大丈夫」と思わせるのろし的意味合いがあると思います。

津村 笑顔があれば、また頑張れ

家庭排水に含まれる油の処理問題など下水処理の大きなエポックを経験してきた。そして今度は放射性物質である。

意識が高まるなか、下水処理の重要性はますます高まっている。三田村さんの活躍に期待したい。(小西洋也 記)



ますからね。

日向 東北の復興はこれからです。ずっと続けることが大切だと思っています。

津村 最後に後輩と先輩に一言ずつお願いします。

日向 ではまず後輩へ。とりあえず英語を頑張ってください。世界大会で気づいたんですが、日本と韓国以



日向大祐 / マジックエアリスト。平成9年海城高校卒。東大・同大学院卒。2009年欧州マジックチャンピオン。2009年マジックのオリンピック「FISM」日本代表。

日向さんはマジシャンという枠にとられず、人とのコミュニケーションを大切にされる方でした。ますますのご活躍をお祈りいたします。(まとも 国井信男)

津村大樹 / 平成20年海城高校卒。首都大学東京来春卒業。同大学院進学予定。高校では文化祭実行委員長。生徒会長。大学では大道芸について研究。



海城高校を卒業した 女子生徒たち

片岡清子さん(旧姓永井)卒業後、海城同級の片岡平八君と結婚。物静かな人で男子ばかりの学校で恥ずかしかったと言っているが、今もそのころに戻りたいと当時は懐かしんでる。



高松園子さん(旧姓後藤)卒業後証券会社などで働いていた。我が家が同じ町内会で、よく顔を合わせていたが、昨年亡くなるまでロマンチックな文学少女だった。



藤井京子さん(旧姓小川)学年のトップの成績を競っていた。明るい笑顔と知性、頼もしい存在だった。東京都立大学工学部化学科卒、のち同大金属工



海城学園に女子生徒がいた時期があった。終戦後の昭和22年、空襲で焼け野原、新宿区立新制中学生のための校舎が間に合わず、海城に一年間借りした。翌年新校舎ができ、大半は移って行ったが5人の女生徒がとどまり、海城高校の28年卒業生となった。戦後の混乱の中の珍事ではあった。彼女たちの現在を追った。(片山忠美)

片山時子さん(旧姓中川)在学当時から小牧バレエ団に所属し、中川弓の名で数々の舞台を踏んだ後、バレエ教師として現在に至っている。同級の片山忠美(筆者)と結婚した。



蒲田泰子さん(旧姓尾本)卒業後、海城の理科教師をした蒲田重雄さんと結婚。海原会でも長く役員をしている。静かで優しい女性。妹さんがやはり海城で事務員をしていた。

藤井京子さん(旧姓小川)学年のトップの成績を競っていた。明るい笑顔と知性、頼もしい存在だった。東京都立大学工学部化学科卒、のち同大金属工



戦中学園生活の思い出

戦時中、海城中学に在籍していた山口卓也さんが「当時こんなこともあった」ということを知ってもらいたいと原稿を送ってくれました。山口さんは卒業前に疎開先の中学校に転校していますが、海城時代を懐かしく思い出しています。

隊列組み行進

太平洋戦争たけなわの時、中学二

年であった。学校の教練の時間は決まって隊列を組み校庭を出て街中を行進した。その折、退役軍人の教官が「予科練の校歌!」と叫んで号令をかけると我々は一斉に歌いながら行進した。ある日の朝、早朝訓練で新大久保の学校から原宿の明治神宮に行進した。そこでばったり時の首相、東条英機に出会った。私服だったが、頭が禿げていたのですぐその人と判った。お参りを済ませたのであろう、首相はこれから議会に行くところだと言われ

空腹で馬も死ぬ

我々の頭をなでて行った。学徒動員先は陸軍の輓馬機動部隊・整備隊。寮に入つて、馬の世話に当たった。しかし支給される食事は質、量ともに最低で腹が減つてたまらず、畑で青いトマトであろうとも食べ、飼葉桶に混ぜられている大豆粕まで選んで食べた。馬も同様であった。いくら草を与えてやっても足りず、倒れたり、死んだりするものもい

た。そんな状態であったからか、馬はしきりに馬房の柵(厩栓棒)を齧っていた。今でも古民家の馬小屋を覗くと厩栓棒に目がいつしてしまう。それでも今となつては裸馬に跨り、馬場を駆けたり、多摩川に連れて行って体を洗つてやったりしたのも貴重な体験をさせてもらったと思つている。時の経るのは早いもの。今年で戦後63年になる。時の流れに流されてきたものの、さまざまなお出会の旅をしてきたものだと思つて感慨に耽つている。

〈追記〉

当時海城中学は確か校長は元海軍中将嶋校長、教練の退役軍人の教官は根本先生、明治神宮に同行されたのは日高先生だったかと思つています。65年くらい前のことで記憶違いがあつたかもしれませんが。また動員先は今府中の東京競馬場です。先だってちょっと覗きに行つたのですがもう自分らの住んでいた寮や馬小屋はどこにあつたかも見当もつきませんでした。

50年目の修学旅行

学園生活の 空白を取り戻す

昭和36年卒業生の同窓会「海城36会」が10月末、50年ぶりに「修学旅行」を実現した。全卒業生約350人のうち37名が参加、世界遺産に登録された「みちのく奥州」の名刹・中尊寺を中心に1泊2日のバス旅行を楽しんだ。

修学旅行のない学年

海城高校の永い歴史を通して修学旅行が行われなかったのは、我々世代だけである。当時、前年の修学旅行で不祥事が起きたことを受け自粛の意味を込めて見送られたものだった。この事実は今や学校関係者にはほとんど知られていないが、一部では高校の唯の「汚点」として意識の底に深く刻み込まれていた。

「海城36会」でも、同窓会のたびにこの事が話題になっていた。「何か大事なものを忘れてきた」という感慨を持つ同窓生も多く、自然発生的に「みんなぞ忘れ物」を取りに行こうじゃないか」という声が上がりが衆議一決。東日本大震災の被災地を少しでも元氣付けたいという意向も働いて、東北での「50年目の修学旅行」が実現した。

37人のバス旅行

総勢37人の中には奈良や浜松、甲府から駆けつけ、盛岡から現地集合の同窓生もいた。また6年前急逝した大西進君は遺影で参加。新宿からバスは高速道路を一路北上、松島に直行したが、車中での自己紹介ではそれぞれ



れが自身の人生模様や現状を語り、役者で齢70を前にして劇団を旗揚げした溝口舜亮君は「『口あいて臍物見せる石榴かな』の心境。頑張ります」と演劇への決意と支援を訴えた。「修学旅行でアルコールは如何なものか？」の声もよそに早くもメートルを上げる仲間もいるなど、道中、大いに盛り上がる。松島では日本三景を船で堪能した後、宿泊地秋保温泉に到着。食事に続いて二次会・三次会と宴が続き、50年の時間を取り戻すように、一行は歓談に時間を忘れた。

(滝本喬 記)

中2に人生を語る

いま海城学園では中学2年生を対象にした「コミュニケーション授業」というのが行われている。価値観の違う世界や他者とも意思疎通をスムーズに行える「コミュニケーション能力を育成しよう」というのがその狙いだ。そこではまず普段接する機会のない大人（地元商店街の店主、OB、神社の宮司さん、俳優、編集者など様々なゲスト）たちと話を聞くことから始め、その聴いたことを文書にまとめ、さらにそれを基にして寸劇を制作して、皆の前で披露することまでをやっている。こんな「コミュニケーション授業」にゲストとして参加した学園OBの小川晴望氏がその授業の様様を送ってくれた。



授業の様様を送ってくれた。

去る6月16、17日に行われた「コミュニケーション授業」の講師を昨年引き続き依頼され参加しました。生徒は6、7人のグループに分かれ、それぞれの講師と自由に話をするので、生徒にしては初めてみる先輩に何か話しかけたらよいのか、なかなか

言葉が出てこない状態でした。普段家族か学校の先生以外の大人と話をすることなどの機会がなかなか持てないことなどを思うと、当然のことかなと思えました。そこで私の方から次のような話で口火を切りました。私の中学二年生時は戦後2年目で、家は戦災で消失し、やっとなの歌舞伎町に親がバラツク家を建てて商売を始めたこと。私も家の手伝いをしながら、自分自身でも「銭」を稼がなければ生活できないので、外国製たばこの吸殻を拾って、タバコの葉のみを集め、父親が学生時代に使っていた英語辞書の用紙を破って一本のタバコにして売ったり、露天大商の手伝いなどもしたりした話をしました。

聞いていた生徒には驚きの表情が見えたりもしていました。その後は第一志望の就職試験に失敗した話や、その後の「仕事」や「いきさま」についても話をし、質疑をはじめ、そして最後に私の大事にしている言葉を話しました。それは人と接した後の「三省」です。①相手の話を十分聴いたか②相手に不快な思いをさせなかったか③自分の話を十分伝えられたかです。学生の本分は勉強だし、自分が描いている目標に向けて努力することについて後悔することのないよう頑張りたいと思います。また健康管理は重要でかつ大事なことであり、常に念頭に入れて生活してくれるよう伝えて終わりました。

(昭和26年卒 小川晴望)

今年も野球部を応援

今年の夏も海原会では例年通り
海城高校野球部の応援をした。

今年の海城野球部には189cmの竹内投手と180cmの佐藤捕手という大型バッテリーが登場し、前評判も上々。制服の海城生、そろいのシャツや帽子の海城OB、黄色い声援のお母様方、糸乱れぬプラスチックバンド。海城側応援スタンドは常に相手校を上回る熱気に包まれていた。

●2回戦(神宮第2球場)

海城は2回戦の対筑波大駒場高校戦から登場。ともに東京大学野球部に出身者を送り込む進学校同士の対決であった。

海城打線は初回から積極的に打って出て試合を有利に進め、8対5での勝利となった。

●3回戦(神宮第2球場)

3回戦は対都立小松川戦。30度を超える暑さの中、海城打線は14

安打とよく打ち、1対11の6回コールド。快勝であった。

●4回戦(江戸川区球場)

4回戦は甲子園出場経験もある対駒澤大学高戦。

両投手とも制球に苦しむも、野手の援護で投手戦の展開。海城打線は3回まで将積君のヒット1本のみ。竹内投手は3回に1失点の後、何とか持ちこたえていたが7回の相手4番スリーランで万事休す。0対5の敗戦で海城ナインの夏は終わった。

海城高校野球部は、来年から梶新監督のもと、夢舞台を目指すこととなる。

※試合の詳細は海原会ホームページのクラブ・委員会広場に掲載されています。
(国井信男 記)



吹奏楽団定期演奏会

力強く豪快な演奏に感動

5月5日、今年も恒例の母校吹奏楽団定期演奏会が、中野ゼロホールで開かれた。多数のご父兄のなかにセラー服の女生徒も混じり、甲斐甲斐しくサポートするお母様方と相俟つて、華やかな雰囲気は、かつての、母校には見られなかった風景である。

演奏はワインの新酒を楽しむような軽快なワルツ、「ワインはいつもワイン」が始まった。続いてジャズの香りをほんのり効かせた「ハイ・ソサエティ」。さらに、哀調を帯びたトロンボーンが、「ロンドンデリーの歌」お馴染みのダニーボーイのメロディを奏でる。一転して舞台は衣装も、楽譜台も、ミッキーマウスで飾られたデイズニーの世界に変わる。佐藤先生の柔らかいタクトさばきで、トランペット、ピッコロ、フルート、チューバなど、金管、木管の絡み合いがコミカルな雰囲気を作りあげていた。そんな中、メリー・ポピンズ役の妙齢な生徒とエントツ掃除役が、演奏を盛り立て、観客の笑いを誘う。

休憩の後は、「エスパーニャ・カーニ」。福島先生の解説で期待感が盛り上がり、佐藤先生のメリハリのついた指揮に心酔し、力強く、豪快な演奏がホール一杯に響き渡る。男子校の吹奏楽は、その力強さはお手のものだが、その中に繊細な音色も取り



入れて絶妙に絡み合う様は実に見事だ。最後は、組曲「百年祭」。福島先生曰く、学園創立より20年の今年に因んでの選曲と言う。荘厳、華麗な金管の生き生きとした響きで始まり、打楽器の力感溢れる響きに、金管、木管の響きが、一体となって、一気にファンファーレに駆け上がる。そして、万来のアンコールに心酔し、我が海城に最もピタリとくる、「錨をあげて」で締めくくった。震災の影響で、練習環境やその時間が制約された中で、団員諸君のひたむきな演奏、本当にありがとう。気分爽快な一時でした。そしてこれは、団員OB、ご父兄、先生方の大いなるサポートがあることに、あらためて、感謝いたします。
(昭和34年卒 安藤浩)

思い出のKSマーク

私ども海城生は夏の衣替えの季節になると半そでのワイシャツの着用を許される。そのワイシャツには丁度胸のポケットの上に海城生であることの証であるKSの紋章の入ったマークがプリントされている。私どものころはこのマークが一年次、二年次、三年次と三色のマークになって、一目で学年がそれと分かるようになっていた。私は卒業後30年も経ってしまった古きオッチャンであります。いまから5、6年前、ふとJR中央線に乗っておりましたところ、やはりマークの入った男子3人が比較的すいていた列車に腰掛けていた。一目でわが母校の後輩とわかりました。向こうは何も関係の無いオジサンを見てもか見ぬか、しばらくして、「なんでこんなことしなくちゃいけないんだ」と一人の橙色のワッペンがこぼした。我が学生時代をふと思いつ出した。

(昭和55年卒 堀川一彦)

クラブ 訪 問

アメフト部

部員／高校生のみ23名

地学部

部員／中学38名・高校19名

地学ははじめませんか！

大震災や気候変動などから、いま地球を視て考える地学が注目されている。

5号館2階の共同実験室に、地学部顧問代表の上村剛史先生を訪ねた。南極に1年4か月滞在し、「海底に湧き出す地下水」の研究をしていた先生は、学園就任5年目の地学専任教諭。地学部も創部5年目。

地学を一口でいうと、「現実を視る学問」とおっしゃる。自然科学は、現実世界のある部分を切り取って、その中から法則性を発見していくが、地学はそれに加え地球環境問題・自然災害など、いろんなことが複雑に絡み合ったものを、全体的にとらえ、それらの相互作用を研究するフィールドサイエンス。地学の研究の方法論は、いろんな方面で役立ちそう。知識は忘れても、見方・

自主性とやる気の集団

アメリカンフットボールという競技が日本の高校でも結構盛んだというは知らなかった。我が海城でもアメフト部ができて30年近いという。東京都の高校体育連盟主催の公式戦で過去に3回、ベスト8まで勝ち上がった実績もある。しかも卒業生の中には東大や京大のアメフト部のキャプテンを務めるなど、多くのアメフトの強豪大学で海城出身者が活躍しているとのことである。

そんな伝統と実績を聞くと、さぞかし厳しい練習に明け暮れる運動部の姿を想像するが、実はアメフト部には専属のコーチがない。顧問の竹内和義先生〈英語教諭〉も「全くの素人です」という。しかも部員のほぼ全員が初めてやるスポーツだという。それでも続いてきたのは「生徒の自主性やる気、それを応援する熱心な先輩や保護

考え方は忘れない。

それだけに地学部は、①実物にふれ、現場を視て体験すること、②自然相手に仲間と協力して研究することを大事にする。ちなみに、去年の夏は20名ほど



を引率して、滋賀で合宿

（上写真）。根尾谷断層、伊吹山、琵琶湖、関ヶ原などさまざまな自然や歴史の名所を訪ねた（こんなことするんですね！）。部活動は、天文、地質、気象・水文、自然災害の各班に分かれる。水文班が昨年生物部と合同で、新宿区の「おとめ山公園」の湧水の現状を調査し、「都市における地下水の環境変化」をまとめた報告は、日本地球惑星科学連合2010年大会で奨励賞を受賞した（下写真）。

（北村隆 記）

者の存在があるから」と竹内先生はいう。

部長の大村崇寛君も中学時代は野球をやっていたが、「先輩から誘われたことと高校では何か新しいことをやってみよう」とアメフト部を選んだという。現在部員は23人。中にはアメフト

漫画で興味を持つて入ってくる者もいるという。それでもOBや先輩に教えてもらいながら自分たちで練習のメニューを考え、試合でのフォーメーションや戦略を考え実践経験を積んで育つて行く。「人数の少ない分すべてのことを経験する。試合に出るチャンスも多く努力のし甲斐がある」（大村君）ことが部員のモチベーションになっているようだ。その結果「どこにも負けないチームワークの強さを持つている」と竹内顧問。今の最大の目標は「来年4月の都大会で一勝をあげること」（大村君）。みんなで応援をしようではないか。

（小西洋也 記）

永年会費納入者（敬称略）

平18	牧野 勇樹	平12	小関 隆善
（前回氏名誤記）			
平22	齋藤龍太郎	平15	宇田川真司
平12	大久保隆晴	平21	菅谷 通宏
平22	真子 敏	平22	石渡 誠和
昭45	村越 一夫	昭37	渋谷 晏弘
昭35	若尾 東洋	昭46	河野 敦之
平3	鈴木 豊	昭20	村瀬 博樹
平16	大塚 匠	平20	大庭 崇弘
平22	西川 直樹	平23	菅原 裕人
昭38	廣田 弘	昭29	松田 武司
（四万円）			
昭56	益田浩一郎	平17	羽賀 健人
平23	清水 拓海	平21	古賀洋一郎
平3	藤田 英樹	平21	伊藤 泰史
平22	本田 将隆	平7	中川 順平
昭34	小山 隆紹	平20	篠原 友樹
平23	吉澤 貴博	昭57	宇田川敦史
（三万五千円）			
平20	屋田 憲吾	昭53	伊藤 明
平19	長谷川雄太	平11	宮内 教行
昭58	松岡 清志	平9	安成 隆行
平20	服藤 玲	（三万二千元）	
平23	谷口 凌平	昭16	大杉 仁
平23	小田 貴之	昭33	中島 芳彦
平23	滝澤 紘樹	（追加三万円）	
平23	小林 凌	（追加三万円）	
昭56	中嶋 正樹	（追加三万円）	

平成23年3月から11月まで（受領日順）

寄付 昭26年卒 徳田 和言（五十万円）

永年会費を納入されている方にも、封入作業の都合で、会費の振込用紙が同封されていますが、悪しからずご了承ください。

